



高専生と一緒に放射線を測定

原子力機構、長岡技術科学大と福島高専のフィールド実習に参画

原子力機構は3月下旬に、全国から集まった高専生を対象に福島の環境回復に関する状況の説明とサーベイメータを使った測定実習（＝写真1）を行った。参加した学生の一人は、「測定実習や見学などを通して福島でしか体感できない経験ができた。福島での実習に参加できて良かった」と語った。

この実習は、文科省の平成25年度「国際原子力人材育成イニシアティブ事業」の採択を受けて、長岡技術科学大学と福島工業高等専門学校が「福島フィールド実習」として実施したもの。全国19校の高専と長岡技術科学大学から41名が参加した。

実習に参加した学生は初日に、東京電力第



二原子力発電所を見学。東電の担当者と意見交換を行った。その後、原子力機構の職員が放射線に関する基礎的な知識と放射線測定について講義。続いて、福島環境回復に向けた原子力機構の取り組みの現状を紹介した（=写真2）。

学生からは、放射線モニタリングを行っている無人ヘリコプターの性能や、放射性セシウムが将来どのように移動していくかなどの質問があった。また、いわき市の職員からは、さまざまな農産物に対するモニタリングや果樹園の除染、県内外での風評被害払拭に向けた取り組みが紹介された。説明後の質疑は19時以降も続き、学生たちの関心の高さをうかがわせた。

2日目は広野町での測定実習と、仮置き場と除染作業の見学が行われた。広野町役場建設課の松本正人課長は、地震と福島第一原子力発電所事故に伴う広野町の被害状況と現状について講義。県の防災システムをはじめ電話やFAX、メールなどすべての通信手段がほとんど機能しなかったなかで、全町民を避難させた当時のもようや、除染と帰還へ向けた現在の取組について説明した。

その後、学生たちは原子力機構などが用意したNaIサーベイメータやGMサーベイメータ、γプロッタを使って、空間線量率の測定や遮蔽効果の測定実習を行った（=写真3）。実習を行ったエリアは、原子力機構が「除染モデル実証事業」を実施した対象区域で、グラウンドや駐車場、公共施設、森林が広がる。学生たちは初めての経験であり、思い思いの場所をグループで測定した。また、鉛板を用いたコリメータやベータ線線を容易に遮蔽するアクリル板を使い、放射線の遮蔽を体験。講義や意見交換会の説明だけでは理解しづらい放射線の特徴や環境の放射線状況について、学生たちは実際のフィールドでの放射線



測定を通して実感した。

測定実習を終えると、学生たちは広野町の除染作業で発生した除去物を保管する仮置場（＝写真4）と道路周辺の法面除染作業を見学した。仮置場は機構が「除染モデル実証事業」で設置し、広野町に移管されたもので、収納容量は6,000m³。そのほか、広野町での除染で発生するものを収納する4基（計49,000m³）が建設されている。

広野町は平成24年3月から、同町自身で町内の生活圏の除染を開始。一般住宅や生活圏から20m以内の森林、農地の除染は終盤を迎えつつあるが、森林の除染と、除染で発生した可燃物の減容化が課題として残っている。そのため森林の除染方法、焼却による減容化施設の早期建設を環境省に要望していると松本課長は講義を締めくくった。

原子力機構では福島高専と、復興のための人材育成を図る連携協力協定を結んでおり、放射線の測定分野などで引き続き、高専生たちの実習を応援していく。



TOPICS 福島 No. 47

独立行政法人日本原子力研究開発機構

福島研究開発部門 福島事業管理部

〒960-8031 福島県福島市栄町6-6 NBF ユニックスビル1階

TEL : 024-524-1060 FAX : 024-524-1073 HP : <http://fukushima.jaea.go.jp/>